

Haemophilia 日本語版

Vol. 5 No. 3 の編集に当たって



担当編集委員

福武 勝幸

東京医科大学臨床検査医学講座

今年には第26回世界血友病連合国際会議が10月17日から21日まで、タイのバンコクで開催されます。大会長は International Hemophilia Training Center (IHTC) Bangkok をディレクターとして運営されている Mahidol University の Partrapon Isarangkura 教授です。この会議は、世界各国から患者と医療関係者が同時に集まり、両者が相互に講演を聞いたり討議をしたりできるという特徴を持っています。日本からの参加者はあまり多くないのが現状ですが、これからは是非とも日本からも多くの患者と医療従事者が参加して、世界の人々との交流を通して広い視野で血友病の問題を考えていかなければならないと思います。

本号では Review Article として、世界血友病連合における40年間の血友病ケアの地球規模での向上の歩みを取り上げています。ここでは結成から40年を迎えた世界血友病連合の歩みを歴史として述べるとともに、WHOとの連携、HIV感染症による苦難、そして今後の目標について幅広い内容が整理されています。この論文は世界血友病連合についての理解を深めていただく上で重要な役割を果たすと思いますので、多くの患者と医療関係者に読んでいただくようお願いいただければ幸いです。もう1つの Review Article として取り上げたのは、「血友病における HIV と HCV の重複感染」です。両者の重複感染は肝臓疾患の進行を加速し予後を悪化させることが明らかになったことから、医学的条件の許す患者については可及的早期に HCV の治療を推進するべきであることを述べています。欧米では Peg インターフェロンとリバビリンによる慢性C型肝炎の治療は標準的治療法として普及しており、日本でも当然推奨すべき治療法になると考えられます。欧米ではこの治療が自己注射により行われており、日本でも早期に自己注射治療が承認され、患者の身体的負担を最小限に抑えた治療が出来ることを願い要望しているところです。

日本では一部の小児患者について定期補充療法が始められていますが、まだこの概念は一般的ではありません。しかし、将来の関節症の発生を防ぎ長期的な生活の質を高める効果は明らかとなっています。この定期補充療法は米国で普及していると思っていましたが、十分に利用されていない理由が紹介されていたので全文を翻訳しました。また、ガイドラインの欄ではスコットランドのグループにより作成された歯科治療におけるガイドラインを紹介します。最後に会議報告として「分子レベルでの挑戦とウイルス性疾患」と題した会議のまとめを掲載しました。この会議では、血液凝固に関する新しい情報の整理、インヒビターの問題、C型肝炎、変異型CJDの問題から遺伝子治療に至るま

で、血友病の周辺にある重大な問題が整理されています。ここで示されている内容は非常に重要なものが多く、患者も医療従事者も是非とも目を通して共通の認識をもっていたきたいと思います。

本号では重要な意味をもつ比較的長編の論文を多く取り上げたため、原著論文についての概要紹介を行うことが出来なくなりました。しかし、本号に掲載された論文は非常に重要な整理となっており、これまでの血友病治療の変遷から現在の状況までの全てを理解していただけるものと思います。そして、皆様の周囲におられる血友病診療に関わる方々に、是非とも本号をご紹介いただきたくお願い申し上げます。